

この空に聞く

加藤海運社長

南 克幸氏

海・陸・空 グループ 一貫物流の完結体制を整備



—国内経済の状況と内航市況についてどうみられているか。

東京オリエンティックまでは政府主導で景気はある程度維持されると予測する。しかし、真の内需回復には至っておらず課題も山積されているので、予断は許されないと常に警戒している。

内航市況に関しては、一時の底は脱出したが、以降抜本的に輸送量が（現時点では）増加しているわけではない。

—事業強化など今後の経営戦略について伺いたい。

まずは足元を固めることに専念したい。リーマン・ショック以降、低迷する用船料でもついてもてくれた船主との信頼関係を強め、代替船の建造・入替という形で未来につなげていきたい。船員の確保に関しても協力し

ていきたい。事業強化の面では、当社は食糧関係（肥料・飼料・穀物）の輸送が中心だが、それ以外の分野にも積極的に進出し、輸出入から梱包事業まで、陸・海・空とグループ一貫で物流が完結できるように体制を整えているところである。

—今後の建造計画について。

本年の2月で船齢18年となる499総トン型の社船をリプレース建造する。これは来年3月に竣

工を予定（1710重量トン）している。

—今後の海上輸送量見通しと前年度の輸送実績について伺う。

年間300万トン以上を目標としている。リーマン・ショックで約7割まで激減したが、徐々に回復し前年実績では280万トンまで回復してきた。

—今年度売上高見通しについて。

本年度の年間総売上げ（8月決算）については、75億円強を見込んでい

る。

—支配下船腹量についてはどうか。

社船は499総トンが1隻（1568重量トン）、用船は499総トンが9隻（1万4300重量トン）、199総トン型が8隻（4800重量トン）の計18隻となっている。

—荷主対応で心がけていることや、望むところは。

当社のスタイルは確実配船の徹底である。経済要因また天候要因により波があるが、全国的に船舶が逼迫している状況でも、極力荷主の要望通り配船を行ってきた。ここ

にきて、信頼関係も構築されていると実感する。

また、最重要課題の一つとして、安全強化に努めている。船会社の使命は、何といたっても安全第

一、安全運航に尽きる。

当社では、先代の時代から「安全は財産」と位置づけ、命と信用両面で大切に考えるよう社員に指導強化しており、今後も事故トラブルなく安全確実な配船の実行を徹底していく。

—そのうえで、まだ十分でない運賃について適正運賃への理解を得るよう説明し続ける。

—船主への対応についてどうか。

船主に対しては、リーマン・ショック以降、多大なご協力を賜っていただき、感謝している。今後は適正運賃をもらい、収支の改善に努めることで適正な用船料につなげた。先ほど言ったが、信頼関係を強化し代替建造という形で永久的関係を維持したいと考えている。